

つた まも
伝え守る アイヌ三世代の物語



うい まきこ/写真・文

少年写真新聞社[382]

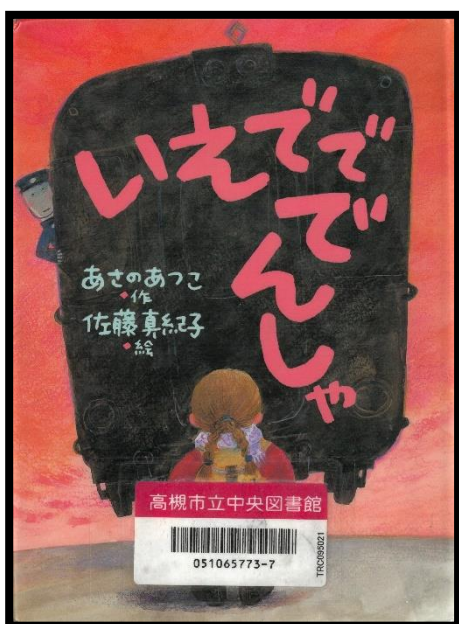
特集:かぞく

おおさか
大阪生まれ大阪育ちのダイキとワカナのお母さんは北海道生まれのアイヌ民族です。お母さんのひろ子さんは、多くの人にアイヌ文化やアイヌの考え方を伝える活動をしています。

ある日家族は祖父がくらす北海道に移住する決心をします。ダイキたちは自然とともに生きてきたアイヌの知識や伝統の踊りなどを教わります。

大切なことは文字ではなく、口から口へと語り伝えてきたアイヌ民族。その血を引く家族が、自分たちの文化を受け継ぎ、伝え守ろうとする姿を写真を通して紹介します。

いえでででんしゃ



あさの あつこ/作

さとう まきこ/絵

新日本出版社[913アサ]

さくら子は、9年間生きてきてはじめての家出をした。ガラスの花びんをわったという「ムジツのツミ」でママにしかられたのだ。言いたいことがちゃんと言えない自分にくやしくてなみだが出た。

リュックをせおって、タぐれの小泉えきについたさくら子の前に、ボロボロの電車が入ってきた。ぎろぎろした目のしゃょうさんが出てきて「家出する子はみんなのるんですよ。ただですよ」と声をかけてくる。

さくら子に乗せて、いえでででんしゃはどこへ行くのでしょうか。

うちはお人形の修理屋さん



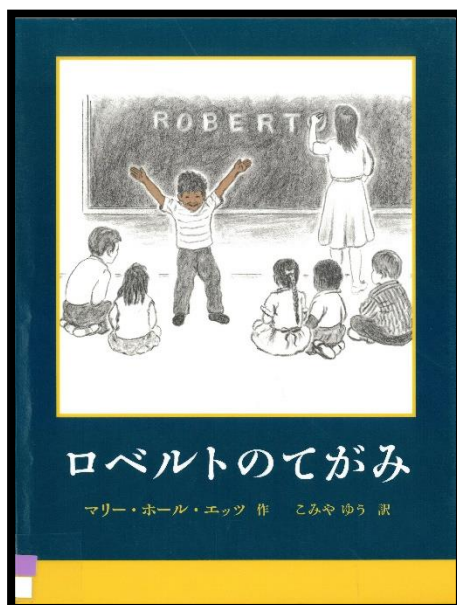
ヨナ・ゼルデイス・マクドノー/作
おびか ゆうこ/訳 杉浦 さやか/絵
徳間書店〔933マク〕

両親が営む人形修理店の2階に、家族とくらすアナは、姉妹といっしょに、修理待ちの人形で遊ぶことが大好きな9才の女の子です。学校や家でいやなことがあっても、お気に入りの人形のベルナデッテに話をすると、アナのむねの中のものもやが消えていくのです。

ある晩父親は、アナ達を居間に集め、ドイツとロシアの戦争のせいで人形の部品が手に入らなくなり、仕事ができなくなったと言いました。アナは何とかして両親を助けたいと思います。

20世紀初めに、ロシアからニューヨークにやって来た、一家の物語です。

ロベルトのてがみ



マリー・ホール・エッツ/作
こみや ゆう/訳
好学社〔エ〕

移民として、メキシコからアメリカにやって来たロベルト一家は、学校に通っている兄だけが英語を話すことができます。両親と小さなロベルトは、英語を話すことができません。

ある日、お父さんとお母さんがけんかをして、お母さんが子どもたちをおいて家を出ました。日中は誰もいないので、いたずらばかりするロベルトは、地域の「子どもセンター」へ通うことになりました。そこで英語を習ったロベルトは、自分の思いを手紙にします。

作者のエッツさんが貧困地区で社会事業をしていたころに出会った実在の少年をモデルにしたおはなしです。